

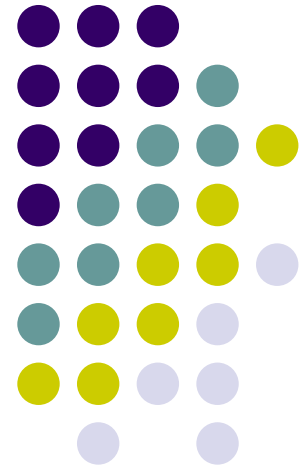
H.18年度 教育学部専門科目

# 臨床心理学(10) (臨床精神医学)

教育臨床心理学ゼミ

教育学研究科付属子ども発達臨床研究センター

田中 康雄





# 本日の流れ

- 前回の意見への返答
- トラウマ, PTSD
- VTR : 死の教育について

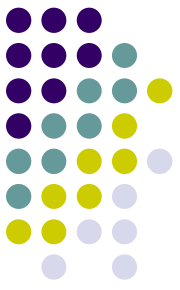


# 前回の意見への返答(1)

## ● 宇治少年院の記録

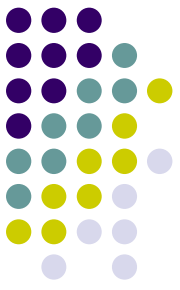
### ● 宇治方式

- 発達のアンバランスを査定: 発達障害に似た状態を示す子どもと非行 への注目
- 自己評価の低下, 傷つきへの注目
- 食事の改善(食材の点検)
- 国語力の向上(日記, 読み指導, 漢字学習, 推論と算数)
- 私語制限(非言語的コミュニケーションの向上と沈黙考)
- 聞く力の向上
- 運動バランスの向上
  - 「心からのごめんなさいへ」品川裕香著, 中央法規



## 前回の意見への返答(2)

- ひきこもりの4つのタイプ
  - あまりにも「単純化」しています。実際は、それぞれにさまざまな要因があるはずです。
  - 発達障害のひきこもりは、社会参加への躓きと、社会からの拒否(消極的にも)があるかもしれません。
  - ひきこもっている状態は精神症状として認められるかもしれないが、精神病がいわゆる「ひきこもり」ではない
  - 親の過剰な干渉, 信頼などについて: 自立することの難しさ, 信頼を獲得することの困難さ



## 前回の意見への返答(3)

- これまでの非行は、ある意味「対象」に対しての言動(社会への反発, 自立への一歩, 自己主張のひとつ, 社会への怒りなど)
- 現代型の非行は対象を外に置いていないのでは? 漠然としたもどかしさ, 反発する他者の不在など)
- 非行の治療
  - 悩むことと, 解決策を探すこと
  - 再社会化への未知(再犯防止)



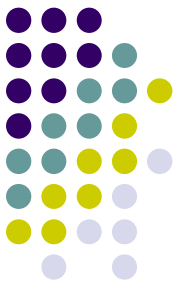
## 前回の意見への返答(4)

- 現代人の未熟性と、家庭不和の原因は？
  - 個人主義の台頭と、共生する意義の低迷？
  - お互い様, という状態の消失
  - ほどほど, よりも「完璧を」という要求水準
  - 支え合うよりも, 一人でも早く, 上手に, 間違いなく, という風潮
  - 他に優しくない？



## 前回の意見への返答(5)

- 1983年とはどのような時代(非行における攻撃性の変遷期)
  - 1965年から70年に生まれた子ども
    - ベトナム戦争, 東京オリンピック, 政治家の不正, 旅客機の事故, 3億円事件, よど号のつとり...
  - 1983年前後に思春期になる子ども
    - 大韓航空機事故, ファミコン発売, くれない族



# 心的外傷:トラウマ

## ● 特徴

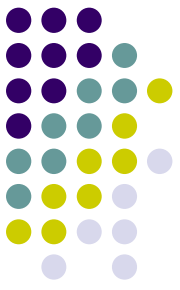
- トラウマとは、自我が対応できないほどの強い刺激あるいは打撃的な体験が与えられること.
- 恐怖を体験したことで、自分の世界がいつでも安全とはいえなくなってしまった.
- 周囲の安全を疑う.
- 再びトラウマを受けるのではないかという不安・恐怖
- 恐怖と孤立無援感とを起こさせる.





# 災害・被害の定義と分類

災害・被害	例	解説
自然災害	津波や洪水，火山噴火や地震など	一般に神の御業とされ，出来事そのものが個人の責任にされることはありません。そのため，地域的には皆一丸となって対応しようとしています。
技術災害	食中毒事故，放射能事故，交通事故など	これは，本来防ぐことが出来た「事故」であるため，誰か彼かが「責任」を負うという「責め」が生まれます。その責任を巡り，感情的な問題が生じやすく波及する被害が発生する可能性が少なくありません。地域的には分裂・対立しやすいと思われれます。
人的犯罪	誘拐，レイプ，暴力，虐待，殺人など	一方的で突然の「防ぎきれない出来事」で，著しい無力感と安全感の喪失が生じやすく，波及する被害として恥や自責の思いにさいなまれやすいといわれています。そのため，地域内では，こうした問題を開示出来ずに，一人で抱え込むという孤立した状況が作られやすいといわれています。



# 心的外傷(トラウマ)とPTSD

- 心にダメージを負ったとき、「心的外傷:トラウマ trauma」と呼ぶ
- トラウマとは、「個々人が対応できないほどの強い刺激あるいは実際の身体期苦痛, 打撃的な体験」により, 「強い恐怖, 無力感, 戦慄といった反応」を示すもので, 「周囲の安全を疑う」ようになり, 孤立無援感に追い込まれるような状態をいう
- 外傷後ストレス障害 (posttraumatic stress disorder :PTSD)とは, こうした重大なトラウマ体験の後に見られる精神医学的な障害

# 外傷後ストレス障害 (posttraumatic stress disorder) : PTSD



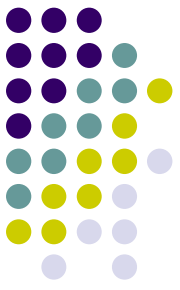
- 実際にまたは危うく死ぬまたは重傷を負うような出来事を、1度または数度、または自分または他人の身体の保全に迫る危険を、患者が体験し、目撃し、または直面した。
- 患者の反応は強い恐怖、無力感または戦慄に関するものである
- 出来事の反復的で侵入的で苦痛な想起で、それは心像、思考、または知覚を含む。
- 出来事についての反復的で苦痛な夢
- 外傷的な出来事が再び起こっているかのように行動したり、感じたりする
- 外傷的出来事の1つの側面を象徴し、または類似している内的または外的きっかけに暴露された場合に生じる、強い心理的苦痛
- 外傷的出来事の1つの側面を象徴し、または類似している内的または外的きっかけに暴露された場合の生理学的反応性
- 外傷と関連した刺激の持続的回避と、全般的反応性の麻痺。
- 持続的な覚醒亢進症状

# レノア・ティアによる心的外傷の4つの特徴



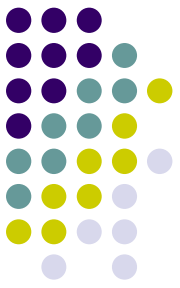
- 視覚的に、あるいはその他で反復して知覚される記憶
- 反復行動
- 特異的な恐怖
- 人々，人生，将来についての態度の変化

# 視覚的に、あるいはほかの知覚によって繰り返す記憶



- 一連の心的外傷を受けてから3年半後、(アメリカ合衆国 風紀委員会が没収したポルノ写真から)5歳の子どもが発見された。彼女は、生後15～18カ月の間、託児所(保育所)で性的悪戯をされていた。両親は、あえて調査官から知らされた事については、娘に一切話さなかった。振り返ると、娘は、初めて絵を描き始めた時から、ずっと何百枚もの裸のおとなの絵をスケッチしていたが、ようやく両親はそのことに合点がいった。私の診察室で遊んでいると、彼女は赤ん坊の絵を描いた。そして、彼女は「はだかんぼ」、「いけない子」と話した。無意識に彼女はまさに自分自身を描いた。この無力な少女の唯一の言語化できる記憶は、「あの女性の家、メリーベスの家は、とっても危険だと思うの」で、これは真実であったにもかかわらず、彼女の大量な描画は、強く視覚化された要素を説明した。それは、非常に早期の非言語的な体験を再現するため、かつ維持するのに必要とされたのだった。

# 視覚的に、あるいはほかの知覚によって繰り返す記憶

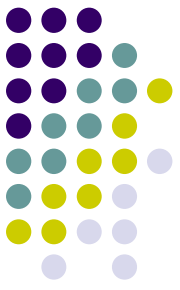


- 40歳の精神衛生専門家が、若い男性非行者達のための施設で働き始めた。墓参りのとき、彼はよちよち歩きの自分の幻影を見た。それは、年長の子どもたちにバラック小屋でいじめられていた光景だった。彼は、4歳まで住んでいた町に出かけた。そこで、かれはあの光景にあった小屋を見つけた。その小屋は自分の住んでいた家の斜向かいに建っていた。



# 反復行動

- 6歳の少女がサーカステントの中に歩いて入って、突然放し飼いのライオンに襲われた。少女は頭皮を裂かれ顔に噛みつかれた。彼女はその数秒の出来事で、外科的処置を受けなければならなかった。後には不揃いな生え際と大きなハゲが残った。この驚くべき経験の後、彼女は他のどんなごっこあそびよりも「美容院」ごっこを好むようになった。彼女は、妹の髪を繰り返しとかしてあげたが、しばしば荒々しく櫛で髪をかきむしることがあった。彼女のお人形は、みなハゲていて、不揃いな生え際であったが、どうしてそのようなことになったのか、だれも正確には把握していなかった。彼女は以前は外向的で親しみやすい子だったのに、家にこもりがちになり、めったに近所にも出歩かなくなった。6歳の彼女の将来の夢は、大きくなってファッションモデルか、「美容師」になることだった。



# 心的外傷に特有の恐怖

- ある少女は、5歳から15歳まで、父親から性的虐待を受けていた。15歳の時、彼女は家を飛び出し、二度と戻らなかった。結婚して38歳になっても、彼女は自分からセックスを始めない限り夫とのセックスを恐れていた。彼女は、そもそも父親にされた体位以外の、女性上位や対等な体位に反応した。近親姦を呼び起こすような体位はどんな体位でも、恐怖と痛みと嫌悪感が生じた。

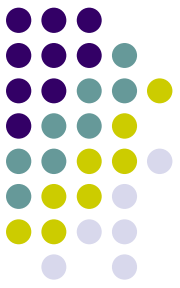


# 人々，人生，将来についての態度 の変化



- 17歳の少年が，運転中に故障した自家用車を止めるため，高速道路の路肩を探していたとき，後方から猛スピードで走ってきた車にぶつけられた．少年の車は大破し，彼は全く無傷で放り出されたが，親友が助手席で焼死した．少年はそれをなす術なく見ているしかなかった．事故後何カ月間も少年は働くことができなくて，ほとんどの日々をふさぎ込んで過ごした．彼は悪夢とさらなる大惨事の恐怖に悩まされた．彼は心理療法を受け始めた．私は初回セッションの終わりに彼に「来週それでは，また」と言った．すると彼は，「来週が存在するということが，どうして判るの？だれが知っているの？ここを出てから死ぬかもしれないのに？路上で殺されるかも知れない．来週先生に会える保証なんて無い．ぼくは，その日その日，まさに一日一日生きている」と話した．

# 人々，人生，将来についての態度 の変化

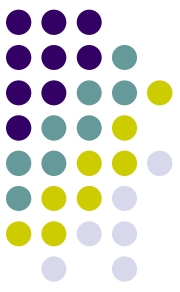


- 8歳時に暴行を受けて以来，自発性が無くなり，クラスでも話さなくなった15歳の少女が精神科の治療にやってきた。高校に進んでも，彼女はあまりにも静かであったから，いつも必要以上に目立つことがなかった。かつて少女は，膣，肛門，腹膜を治療するため，3ヶ月間病院に入院していた。そのあいだ，人生と人々についての態度に重要な変化が生じたわけである。ある男が学校から家に帰る途中，チャイナタウンで彼女をさらい，使われていないガレージに連れ込み，1対の箸で彼女の膣を突いた。少女はこの苦しい体験の後，自分は「あまりにも目立つ」ので，狂った男によって「選ばれた」のだと結論づけた。今後決して再び目立つことはしまいと，自分自身に誓った。人々を信頼することができない，と彼女は信じた。人生は楽しむものでなく我慢するものであると思った

# レノア・ティアによる心的外傷の受け方による分類



- **I 型（単発の外傷）**
  - 完全で詳細な記憶
  - 後からの理由付け（再加工）
  - 誤った認識
- **II 型（長期にわたる外傷）**
  - 否認と心的マヒ
  - 自己催眠と解離
  - 憤怒爆発
- **III 型（混合型）**
  - 絶え間ない悲哀とうつ病
  - 子ども時代の見にくい傷，不慮，痛み



# I 型(単発の外傷)

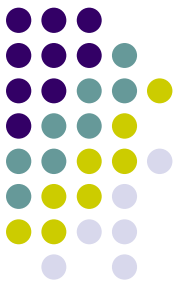
- 完全で詳細な記憶

- 5歳の少年が精神科医をはじめて訪れ、継父が彼の幼い弟を殺害したときのことを細かく述べた。事件は確かに2週間前に起こっていた。その少年はモーテルのテレビ台の下に隠れながらその出来事を目撃した。その少年は、隠れる前に座って横たわっていた場所を正確に話すことが出来た。そして、弟に振るわれた暴力を述べ、暴行を加えた継父の云ったことや脅し文句を正確に繰り返した。「すべて忘れたかった、でも出来なかった」と話した。それまで、彼は机やテーブルの下に繰り返し繰り返し隠れるため、担任教師はその度に叱っていた。しかし、教師も生徒たちも誰一人として、その「悪い行為」の意味を理解でき得なかった。



# I 型(単発の外傷)

- 後からの理由付け(再加工)
  - 母親は、8歳の息子におしゃれなスケートボードを買い与え、歩道だけで使うように注意した。その子は、第1土曜日の朝、はじめて歩道でスケートボードに乗っていたところを、車道からバックしてきた車にはねられた。1年後、少年は「歩道でスケートボードに乗る度、母さんが云ったことを何度も何度も考えざるを得ない」と話した。
  - 16歳の少女が誕生日のプレゼントとして親友からピザの薄切れを受け取った。ピを口にした途端、彼女は腐食剤にのせいで、6週間以上もの間、消化管の損傷に苦しんだ。医療保健担当官によって、食中毒の本当の原因はピザパーラーであることがはっきりしたが、傷ついた少女は、ピザを買ってくれた友人との関係を繰り返し考えた。彼女は友人が自分のことを殺そうとしていたのではないかと執拗に細部にわたり追求した。



# I 型(単発の外傷)

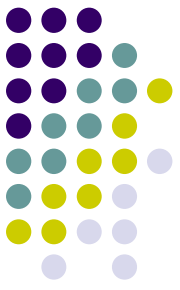
- 誤った認識

- 家族で山に出かけるため、7歳の少女が姉と2人の従兄弟と隣り合ってステーションワゴンに乗った。隣接した山腹から転げ落ちてきた大岩が、その車の屋根を直撃した。姉と従兄弟の一人が死に、彼女ともう一人の従兄弟は助かった。その後何年間も、生き残った少女は、ほとんど毎晩枕元に姉を「見た」。亡くなった姉は、ピンク、緑、オレンジ色の腹を着て、彼女の元を訪れた。彼女はまるで生きているかのような完璧な肉感をもっていた。幻覚である姉は何も言わなかった。生き残った少女は姉の「幽霊」に怯え、と同時に、奇妙にも彼女はその姿に慰められるような気分を感じた。



## Ⅱ型(長期にわたる外傷)

- 否認と心的マヒ
  - 10代後半の兄が、スザンナに性的虐待をし始めたのは、彼女が6歳の時だった。(実は後で判ったことだが、兄は、すでにスザンナを虐待する前に、中学校教師によって性的悪戯をされていた)彼女は、「(自分の性器を指さして)母さん、誰も母さんのを触っていない」と一度だけ母親に話そうとした。しかし、彼女はその性的虐待が始まってから2年半後、スクールナースが気づいてくれるまで、親や教師、友人たちの誰にも一言も話さなかった。9歳の時に行われた精神医学的診察では、初めの数時間の多くを、彼女は指で小さな穴を作り、人差し指をその中に入れたり出したりして過ごした。ぐにやぐにやのカウチ枕を繰り返し、互いにすりあわせた。彼女は兄との経験を語った。「お兄ちゃんは、私のウンチするところに、おちんちんを入れたの。痛かったわ。お兄ちゃんに痛いと言ったの。でも、お兄ちゃんはウルサイと言った。私は、あんなこと全然好きじゃないよ。ちっとも恐くないわ。でたらめよ。私は、絶対別のことを考えてやると心に誓ったの。」「別のことを考える」という、精神的ごまかしをどのようにしたのかスザンナに尋ねた。彼女は、「自分自身に繰り返し「私は知らない」と言い聞かせるの。お祈りするときの最後の言葉(アーメン)を言い続けるわ。時には何百回もするのよ。毎日何度も「私は知らない」と云うのよ。時には、自分自身が今何も感じていないように思うの。悲しむべき時、気が狂いそうになるとき時、悲しみも狂気も感じないのよ。恐がる時にちっとも恐くない。ひどくばかばかしく、気違いのように振る舞うわ。それで、学校のみんなは、私のことを変な奴だと思っているの」と答えた。

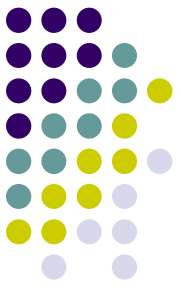


## Ⅱ型(長期にわたる外傷)

- 自己催眠と解離

- フレデリックは、7歳の時叔母の元に預けられた。というのも、母親が夕方仕事に出かけている間、フレデリックは継父によって壁に投げつけられていたことが、夫の不貞を録音しようとセットされていたテープレコーダーに記録されていて、母親が知ったからである。彼は、緊急治療室を2度訪れ、一度は保護サービス調査を受けたにも関わらず、この1年間にわたる物語を誰にも話さなかった。叔母の庇護の元で、フレデリックはある日、遊び場の歩道に目を落とし、血痕を見つけた。あたりに傷ついた仲間がいないか数秒間探した後、出血しているのは自分だと気づいた。彼は何の痛みも感じなかったと実感した。精神療法のセッションで、私はフレデリックに、こうしたことがどのように起こるのか尋ねた。「いままさに起きている」と彼は云った。「ぼくは母さんの膝の上に頭を載せ、楽しくしている振りをしたものさ。はじめて継父がぼくをぶった時は、とても痛かったよ。けれど、母さんの膝の上に乗ると(もちろん想像上でだよ)、ウィンストンはもうぼくを痛めつけることが出来ないことに気づいたんだ。ぼくは母さんの膝の上に居続けた。泣いたり叫んだするどころか、なにもしないですんだんだ。ぼくは確かに他のどこかにいた、そして痛めつけられることはなかった。ウィンストンがどのくらいぼくをぶったかわからないけど、そんなことにちっとも注意していなかった。話したようにね、最初ぼくは母さんの膝の上において楽しかった。いつかは楽しいことがなくなるなんて、母さんの膝のことだよ、そんなこと全く考えられなかったよ。いま何かがぼくに出血させても、膝がないなんてちっとも考えられないよ。痛みを感じないんじゃないんだ。」

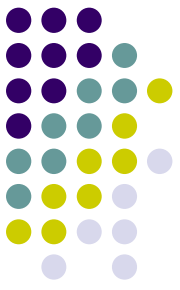




## Ⅱ型(長期にわたる外傷)

- 自己催眠と解離

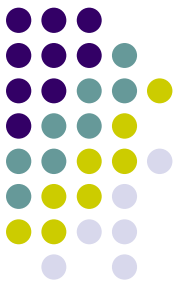
- ジェイミーは、アルコール依存症の父親に繰り返し虐待された。さらに父親が母親を殴るのも繰り返し見ていた。彼は8歳の時、母親が父親を射殺したのを目撃した。9歳で心理学的診察を受けた。そのとき彼は私に云った。「ぼくはいくつかの惑星を動かした。ゲームとしてぼくの惑星を作った。でもいまや、本当のことになった。これからはゲームでない。」ジェイミーはずっと前に創作した安全な惑星、彼自身の惑星を記述した。彼はまた、人々が「殺される」という何とも危険な惑星も創作した。彼は繰り返し安全な惑星を訪れ、安全でない惑星は避けることで、あやふやにしてきたと話した。「6歳から動かしはじめて」彼は話した、「ぼくはあやふやに感じるようになったんだ。母さんが父さんに銃を向けたとき・・・ぼくは見えていない、こんなことは起きなかったって考えていた。夢なんだって、黙認した。ぼくは最初そこにいなかった、それを見てないって、ぼくは自分の惑星にいたって思おうとしていたことを覚えている。ぼくは以前からよくそこに行っていた。母さんと父さんが喧嘩するとき、ぼくは見ないように、聴かないようにしていた。寝てしまおうと思った。普通は出来なかった。親たちが居る部屋から出ようとした。ぼくの惑星に行こうとしたんだ。でも、今のぼくの気持ち、そうだね、空白なんだよ。たいていそれは家で起きるんだ。一瞬、一度に」ジェイミーは夜になると、父親が死ぬ夢を繰り返し見た。日中は父親が殺される姿が目に見えた。けれども父親が射殺された時から、ジェイミーは自分自身をうやむやに出来るかしらと考えた。「ぼくは出来ると思う」と彼が言った。「ぼくは地球上のここでそれをしよう。いつもぼくの惑星でしているのだ。ぼくを信じて、友だちなら信じてくれるよね、父さんが撃たれているとき、ぼくはうやむやに感じたんだ。でも、みんなの前でうやむやになったら、みんなはぼくの力を取り上げちゃうだろう。」



## Ⅱ型(長期にわたる外傷)

### ● 憤怒爆発

- 5歳の少年は、新しい継母にロープに縛られ、クローゼットに監禁されていたが、幼稚園では何事もないかのように振る舞っていた。しかし彼は、家では継母の最もよいランジェリーに鉋を突きつけていた。家族の洗濯物の中には、2度墨汁をまいた。継母の用意した食べ物は一切食べないようにした。継母は、あの子は私に叱ってほしいのかしらと話した。それで虐待はひどくなった。



## Ⅱ型(長期にわたる外傷)

- 憤怒爆発

- 45歳の女性は、広島の彼女の家を原子爆弾が破壊した時、10代の夏キャンプ中だった(彼女の肉親は、全員1945年8月6日に旅行中で不在であり、無事だった)。おとなになって彼女は、怠け者、仕事が出来ない、不貞を働くといっては代わる代わるアメリカ生まれの夫を責めるので、夫とうまくやっていけなくなった。娘が13歳になってからは、彼女は娘をうそつき、麻薬中毒者、泥棒、といっためっちゃくちゃな子と思いはじめた。彼女は、勤務する国際法事務所での同僚ともうまくやることができなかった。彼女は、日本から来た客としかうまくやれないと語った。彼らは「彼女が少女だったときの自国を知らしめる国民」であることを思い出させた。私は彼女に、原爆との経験について話をするよう私の診療室に呼んだ。彼女はこの申し出に2度予約したが、いずれも来れなかった。ここで、原因と結果のどんな仮説をも証明するにはあまりにも時間がたってしまったのは明らかである。しかし、彼女の怒りと猜疑心が、アメリカ人、アメリカの影響下の人々にしか向かなかったことは興味深い。原爆の加害者でなく、犠牲者である生まれながらの日本人だけが、完全に彼女の復讐心的な怒りを抑制させた。

# Ⅲ型(混合型)



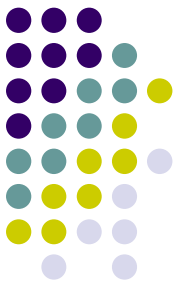
- 絶え間ない悲哀とうつ病

- 4歳の少年は、子どもたちのスイミングプールで、偶然事故に遭った自分の姉の内蔵が飛び出したところを見てしまった。大事故の前に、姉は、弟に遊ぼうといったが、彼は断った。その幼い少女は、当時むき出しの排出管の上に座っていた。事故の後2, 3年、少年は自分自身の完璧なプールを作るかのように、木の積み木で遊んで過ごした。彼は、誘われたのに姉と遊ばなかったことで、自分を責めた。それが姉を傷つけてしまった理由だと感じた。彼は、あの出来事のすべてを鮮明に記憶し続けていた。すなわち彼は、典型的なⅠ型の心的外傷の症状を示した。事故後に移植術を行い、2年後に姉は亡くなった。その後彼は、友人から離れ引きこもり初め、クラスに参加することを避け、多くの時を黙って過ごした。担任は、彼の極端な受動性に不満を示し、全く君らしくなくなってしまうと云った。彼は幾分体重が減り、夜間の睡眠もうまうまかなくなった。陽気さを失い、友人を失いはじめた。彼の悲哀の2年間は、かつての純粋なⅠ型障害にさらにⅡ型の特徴が混在していた。

# Ⅲ型(混合型)



- 子ども時代の醜い傷, 不具, 痛み
  - ある幼稚園児は, 祖母が買い物で店員に支払いをしている間にデパートの商品台によじ登ろうとしたら, 商品台が顔の上に倒れてきた. 顔の骨が折れ, それは綺麗に修復されたが, 事故前と比べとても別人に見えた. 友人達は, 彼女だと判らなかったし, その他の幼稚園児達は, 彼女はベリンダに変装しているに違いないと云った. 実際, 彼女はベリンダでなくなった. 少女は, 以前は外向的で, 悪戯好きで, 活発だったが, 事故後は静かだよそよそしく, 非常に模範的な行動をするようになった. 事故から2年たって, 彼女は「以前は私は悪魔だったの, それでわたしは罰せられた. でもいまはよくなったの」と話した. 彼女は悪夢を見て, 椅子の下での独り遊びを好み, 人形の顔を切り刻むという傾向があるという事実にも関わらず, ベリンダの性格変化は, 心的外傷後の他のすべての所見を支配した.



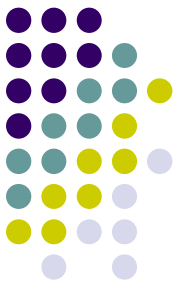
## オクバークによる犯罪被害者特有の症状

- 恥
- 自責
- 服従：無力になり卑小になってしまった感覚
- 加害者に対する病的な憎悪
- 逆説的な感謝：加害者に向けられる愛情，同一化
- 汚れてしまった感じ
- 性的抑制
- あきらめ
- 二次受傷
- 社会経済状況の低下



# 災害における情緒的反応(1)

- 即時体験反応
  - 災害時さまざまな事態に直面したときの反応. 身体が硬直するほどの不安, 自制を失った逃避行動
  - 集団パニックなどの不適応反応
- 災害後の情緒的反応
  - 初期反応: 感覚のマヒ, ハイな気分, 安堵感
  - 回避反応: 災害体験を思い出させる刺激からの回避, 感情のシャットアウト, 強い不安, 体験のフラッシュバック, 侵入的想起, 悪夢, パニック, 失望など.



# 災害における情緒的反応(2)

- **PTSD:子どもにみられるPTSDの症状(山崎)**
  - 恐怖体験を思い出して混乱する
  - 反応性が低下する
  - 覚醒レベルが上昇する
- **喪失体験(家族・知人の死, 大切なものを失う)**
  - 精神的混乱:自分がないような感覚, 考えのまとまりのわるさ
  - 喪失の否定(否認)
  - 感情の切り離し
  - 過度の無力感
  - 強い罪悪感
  - 激しい怒り





# 子どもに見られる反応

- 外傷を再体験する
- 外傷体験を考えることを回避する
- 不安と覚醒が高まる



# PTSDを認めやすい子ども

- 生命の危機に曝された子ども
- 死亡や虐殺の現場を見た子ども
- 不安定な家族関係のある子ども
- 知的障害のある子ども
- 女児の方が男児よりも多い

## 子どもの精神医学的問題の発現と持続に影響を与える親の行動・反応



- 子どもの援助に対する両親の過度の依存
- 過度な過保護
- 一過性の退行的行動や体験について自由に話し合うことを抑圧するような態度
- 災害前から存在する両親の精神病理

# 「その後を生きる者」への理解と援助について



- 子どもの理解する死

- 3歳から5歳の子どもたちは、旅立ちや眠ることのように、戻す事ができるものとして死を理解します。“永遠”は理解することはできません。
- 5歳から9歳は死の終わりを理解することができません。子どもたちは死を“おばけ”や“ガイコツ”“天使”のなかにみます。
- 9歳以上になると、子どもたちは死を人生のサイクルの一部と考えはじめます。全てのものが、生まれ、成長し、老い、死をむかえるという「ひとつの流れとしての生と死」を理解し始めます